

閉じた居酒屋・神保町「酔の助」、ありがとう

神保町交差点から、路地裏に入ってすぐのところにある「酔の助」(よのすけ)という居酒屋が店を閉じた。打ち合わせが終わったあと、「ノドを潤し」に通った店である。コロナの影響もあったのだろう、残念でない。

※写真提供は、水道橋「余白」／亀山久雄さん

この店、単なる居酒屋ではない。下町の風情をたたえた店の中で、開店前に「寄席」もやっていた。私は残念ながら寄席にはよせてもらった(すまん、ダジャレ)ことはないが、盛況だったという。気さくなオヤジさんで、いつもにこやかな笑顔を絶やさなかった。

日本酒党を自認する私は、青森県青森市・西田酒造の「田酒」を必ず注文した。この酒を置いている店としては数少ない存在である。すると必ずオヤジさんは「これは数少ないから一人一杯だけだ」とつぶやいた。分かっているながら「もう一杯」と注文すると、しぶしぶ1升瓶を抱えてテーブルまでやってきた。



店じまいした「酔の助」とお知らせ

つまみは必ずマルゲリータを頼んだ。これはいい。ピザというのは生地の上にサラミ、トマト、ピーマンなどがのっているものだが、ここのそれは生地だけでできている。塩加減が抜群で、ハフハフしながらほおばったものである。

●賑やかだった座敷席

入り口の暖簾をくぐると、テーブル席が並んでいる。ここだけかと思ったら大間違いで、この店の良さはその奥の座敷席にある。詰めればおそらく50人は入るであろう。そこで寄席が開かれていた。座敷にあがるとき、段ボール箱に入れられたビニール袋を渡され、これに自分の履物をいれて自己管理。システムもいい。

料金が安いせいで、学生がよく来ていた。コンパの二次会などに遭遇したものなら、大変だ。それはもう騒音である。が、やさしい客のおじさんたちはにこやかに受け流す。これまたこの店の阿吽の呼吸である。

この店への思い入れは、その立地場所にもある。かつて(50数年前)ここには喫茶店があった。敢えて名前は伏せるが、1、2階を活用した大きな喫茶店だった。若いころよく利用した。天下国家を議論し、長時間居座っても経営者は文句ひとつ言わず、おおらかな時代だった。

明治大学、中央大学、日本大学、そして専修大学と神保町周辺には大学が犇(ひし)めいていた。神保町が「本のまち」になったのもその影響大であるが、必然的に学生がよく集まっていた。

この喫茶店、確か、1980年ころまではあったはずだ。いつ喫茶店が閉まって、「酔の助」に衣替えしたのか定かではないが、喫茶店は労働組合でも使っていた。争議解決をめざす行動や戦略など、あまり大っぴらにできないことを、ここで話し合っていた。私にとっては、なつかしい青春の「場所」でもあった。

さようなら、酔の助。そしてありがとう。

(事務局長・水久保文明)

*千代田区労協通信バックナンバー／http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news2020.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております。